

書評：宮谷尚実『ハーマンと「へりくだり」の言語 ―その思想と形式―』  
(知泉書館、2013年)

谷塚巖

## 1 はじめに

本書は、宮谷尚美氏が2007年度に立教大学大学院に提出した博士論文に加筆修正が施され、それに新たな研究成果が加えられたものからなる（『キリスト教学研究室紀要』の規定に則り、以下敬称は省略する）。日本におけるハーマン研究は、本書第1章の研究史概観でも触れられているように、長年にわたる蓄積が存在するにもかかわらず、本格的な研究書の数はいくつか（30頁。以下頁数のみを略記）。主要なものに限っても、磯江景孜の『ハーマンの理性批判』（世界思想社、1999年）や川中子義勝の諸研究が挙げられるのみである。本書はそのような状況の中で公刊された数少ないハーマン研究の一つに数え入れられる。さらに、難解さをもって知られるハーマンの思想について、従来あまり注目されてこなかった側面から重要な観点も提示されている。本書からは、ハーマンの思想のみならず、ハーマン研究に関する国内外の様々な有益な情報も得ることができる。

本書の構成は、大きく2部に分けることができるだろう。まず第1部では、ハーマンの思想の核心をなす「へりくだり」について論じられ、それが、現代的に理解すれば、まさに「言語コミュニケーション」とも言える思想であることが明らかにされる（序章～第4章）。第2部では、ハーマンにおける文字論や翻訳論、さらにはハーマンの諸著作における「書簡性」といったテーマが個別的に論じられ、そこに「へりくだり」の思想が密接に関連していることが論じられる（第5章～終章）。全体の構成と内容は次の通りである。

序章 「愛言者」ハーマン

第1章 ハーマンにおける言語と文体

第2章 「へりくだり」のコミュニケーション

|     |                           |
|-----|---------------------------|
| 第3章 | 言語コミュニケーションの起源            |
| 第4章 | ハーマンにおける音声コミュニケーション       |
| 第5章 | 一八世紀における正書法をめぐる議論に見る音声と文字 |
| 第6章 | 文字と図像（索引の機能）              |
| 第7章 | 翻訳というコミュニケーション            |
| 第8章 | 書簡による言語コミュニケーション          |
| 終章  | 対話性と書簡性                   |

以下では、本書の方法論についてまず簡単に触れ、それから、本書において特に重要と思われる3つの観点に即して内容を紹介することに努めたい。3つの観点とは、1. ハーマンにおける「へりくだり」の思想、2. ハーマンの文字論、そして、3. 文字と書簡性、である。これらの観点は、ハーマンの「へりくだり」の思想を「言語コミュニケーション」として捉えるための要点となっており、ハーマンの思想的特徴は、本書で提示されるこうした観点から明らかにされる。

さて、本書におけるハーマン研究の目的および方法についてであるが、著者はそれを設定するにあたって、「言語」を主題とした研究に限定してハーマン研究史を辿った上で、次のように述べる。「本研究 [は]、ハーマンの〈真の意図〉の探求や、当時の原テキストあるいはハーマンの言語理論の再構成などは試みず、一八世紀のハーマンのテキストを現代にとっても意義深いテーマである言語コミュニケーションの観点から解釈することを目指す」(36)。すなわち、いわゆる「実証主義」や「歴史主義」といった方法論的立場はとらずに(36) —ガダマーの『真理と方法』の議論を踏まえながら—ハーマンにおける「へりくだり」の思想を、現代の地平から「言語コミュニケーション」として思想的に解明するということである。

一方で、必ずしも明示されているわけではないが、ハーマンの思想を解釈する際に部分的に用いられていると思われる特徴的な方法も挙げることができる。それは、図像学的方法を取り入れたパラテキスト分析である。著者自身も第6章で言及しているように、「パラテキスト」という概念は、ジェラルド・ジュネットに由来する(158)。それは、著作のタイトルや署名、序文、後書き、注、索引といった、本文の要素ではないが、本文を囲んでそれを一つの読まれる書物として現存させる役割を担ったテキストのことをいう(ジェラルド・ジュネット、和泉涼一(訳)『スイュー テキストから書物へ』、水声社、2001年参

照)。本書ではまさにこういったさまざまな種類のテキストを分析することによって、ハーマンの「へりくだり」の思想が「言語コミュニケーション」としてどのように現れているかが明らかにされるのである。以下で、先に設定した3つの観点から本書の内容を見ていくことにしたい。

## 2 ハーマンにおける「へりくだり」の思想

「へりくだり」という概念は、もとは古代ギリシアの修辞学において用いられた概念で、「聴衆に対して語り手が合わせること」をその本来の意味として持っていた(42)。それがキリスト教の教父たちによって神学的に練り上げられ、さらに時代が下ってルターでは、「神が『僕の姿へと自らを覆い隠すこと』が、神の「へりくだり」、すなわち、神の救済行為として考えられるようになった(43)。そして18世紀の啓蒙主義の時代に入ると、神がその語りを通して自らを人間に「適合」させ、聖書を通して「有限な人間の理解に合わせ」ることが、神の「へりくだり」として理解されるようになったという(43)。

著者は、ハーマンにおける「へりくだり」の思想的文脈を、このように概念史的に明らかにしながら、この概念こそが、ハーマンがロンドンで体験した決定的回心後の思想を理解するための鍵であるとする。「ロンドン体験を経たハーマンにとっては神が僕の姿をとったことが重要で、しかも彼の言葉でいえば、この僕の姿は『人間のなかでもっともささいな者』、『一番不幸な者』、さらには『あらゆる民のなかで罪人そのもの』とまで言い換えられるような惨めな姿である」(46-47)。こうして、「神が人となり僕の姿をとったこと」を「救済論的な意味で積極的に解釈」することを通して、「へりくだり」の思想が形成されたという(47)。

ハーマンの「へりくだり」の思想に見られる特徴は、さらにカント宛書簡(子供向け自然学の共同執筆をめぐる三通の書簡)の分析を通して取り出される。それは、①「へりくだる」側にある「超越性」(50-53)、②「弱さ」に対する「へりくだり」と「愛」(53-55)、そして③「誇り」と「謙虚さ」(56-59)である。

ハーマンの「へりくだり」の思想は、このように神の人間に対するコミュニケーション的行為を範型としつつ、それが人と人との間のコミュニケーションにまで拡張されたものとして捉えられる。この「へりくだり」のコミュニケーションは、「他者の立場に自己を置く」ことにほかならないのであるが、ハーマンに由来するこの考え方は、カントでは「共

通感覚」とされた概念である（65-66）。著者はそこで両者の差異を問題にし、それを「他者」理解の相違にみる。すなわち、「カントが言う『他者』は『どんな他者の立場でも』・・・何かを共有できる相手であり、異なる（fremd）立場の相手ではない」（66）。一方、ハーマンが前提にする「他者」は、「自分の『常識』が通じない相手、異質な存在としての『他者』」（66）、「もともと『通じない』異質な他者」（67）である。こういった「他者」に向けられる「へりくだり」のコミュニケーションは、その不可能性を前提にしながら、「それにもかかわらず可能にしようとする」（67）点に意義がある。

以上が「へりくだり」の思想の概要であるが、この思想がハーマンの諸著作においてどのように展開されているかが本書で明らかにされる。次に、その具体的展開の一つとして著者が提示するハーマンの文字論について見ていきたい。

### 3 ハーマンの文字論

ドイツでは啓蒙主義の時代に入り、正書法を合理的に改革しようとする動きが現れた。その主な動機は、時代とともに生じる音声と文字との間のずれを直し両者を一致させることにあった（121）。それは、音声を基軸としてそれに文字を合わせることを意味した。ハーマンが反論したのは、この音声だけに頼って「余剰」とみなされた文字を切り捨てる改革案に対してであった。著者は、ハーマンの反論を次の2つの著作から分析し、そのことを通して、「へりくだり」の思想に基づくハーマンに固有の文字論を明るみに出している。その2つは、『当世ドイツ文学へ捧げる二枚の銅貨』（1780年）および『字母hの新たな弁明、あるいは学校教師H・Sによるドイツ語正書法に関する卓越した諸考察』（1773年）である。

ここでまず留意すべきは、ハーマンがこうした改革案に反論したのは、何も音声を軽視していたからではない、ということである。つまり、音声言語もハーマンにおいてはきわめて重要な、文字言語とは別種の言語コミュニケーションの要素なのである（117-119）。このことは、第4章で詳細に論じられる。ハーマンにおいて音声は、「語り」として、創造論の枠組みから神学的に捉えられる（107-110）。神は「語り」によって世界を「創造」とされるが、その際、神はその「語り」によって「被造物へ」と「超越的」に関わる。そしてその「語り」は「被造物を通して」聞かれるゆえに、神は「内在的」にも関わっている（109）。そして、この「創造」として理解される「語り」によって、神と人間とのコ

コミュニケーションや、人間同士のコミュニケーションが成立する。本書では、こうした音声的なコミュニケーションにおいても、「へりくだり」の思想が貫かれていることが明らかにされる。音声もこの意味で決して軽視されないのである。

このように文字と音声とは一致させられるべきではなく、そもそも両者は異なる起源を有するものとしてハーマンにおいては考えられていることが明確にされる（118-119、151-155）。そして文字論の意義が上記の各著作の分析を通して取り出される。

重要なのは、発音されないゆえに不要とされた字母 **h** の役割である。ハーマンにとって、「字母」は「音」を表す「単なる記号」ではない。それは「音になっていない息」であり、また「イニシャルがそうであるように、発音されなくとも文字の裏に隠された単語を意味すること」もありうる（128）。すなわち、字母 **h** は「息」としても考えられるのであり、さらに別の意味では、「霊」としても受け止められるのであって、そういったことから字母 **h** を排除するわけにはいかないという。

また、ハーマンにおいては、字母 **h** は、「神の霊による啓示」として（134）、つまり、隠されていた「霊と真理」（134）が、**h** という字母に具象化していると考えられている。こういった文字理解はきわめて興味深くかつ示唆的である。なぜなら、ここから、字母 **h** を切り捨てることが、言語における「宗教的なもの」が「理性」によって排除されることになるという、ハーマンの啓蒙主義に対する批判が見えてくるからである。いずれにしても、「文字には人間存在を与える『神の息』である『霊』が吹き込まれ、現れて」おり、「目に見えない『靈感』が目に見える文字となる」（155）と言われるように、ハーマンにおいては、文字そのものが宗教的に理解されるのである。

こうした、ヘルダーなどの同時代者の言語理解（音声中心）とは異なるハーマンに特有の文字理解は、さらに文字の図像性という概念を通して明らかにされる。

著者は、ハーマンの「著作」の一つとしてその特異な形態からこれまでほとんど注目されてこなかった、「たったひとつの文字 **P** に関する考察の小さな試み」（『愛言者の十字軍行』に収録）というテキストに着目し、ハーマンが言語コミュニケーションにおいて、音声だけでなく、文字という図像を介した視覚的な側面をいかに重視していたかを分析している。

このテキストは索引の形をしており、さらに字母 **P** を語頭に持つ語彙だけからなる。著者がこのテキストを解釈するための新たな枠組みとして取り入れるのは図像学的方法である。図像学は、造形芸術などにおいて表現された宗教的なさまざまな表象を理解するた

めに発展した学問であり、分野としては芸術史に属する（マルセル・パコ『キリスト教図像学』、松本富士男・増田治子（訳）、白水社、1970 年参照）。ハーマンのテキストを解釈する際に、通常の解釈ではまず注目されない視覚的な図像という視点を取り込むことは、本書における際立った特徴と言えるが、著者はこの方法によって、ハーマンの文字そのものに対する特異な理解や、さらには、ハーマンの著作における意図を引き出している。

著者が特に注目するのは、文字そのものの視覚的側面がもたらすコミュニケーション的な機能である。ここでは「字母 P」が取り上げられるが、著者によれば、この「字母 P」は、たとえば、Philologe として、つまり「愛言者」としてハーマン自身の自画像を示し、また一方で Publikum として、つまり「読者」として、読者層をも示しているという。こうして、「字母 P はただ単語を綴るための手段でも発音するための手段でもなく、ひとつの文字から別のイメージが暗示され、指示されるような図像的な記号」（168）として理解される。そうした「符号」としての「字母 P」は、「いくつもの語や概念を視覚的・図像的に結びつけ合」（174）わせる機能を持つ。つまりハーマンは、同時代のヘルダーにおける文字理解のように、文字を「声の影であり副次的なもの」（177）としては位置づけない。ハーマンにとって、文字は「音の写しでも影でもなく、あるいは発音のための手段」（179）でもなく、図像性を帯びたものとして、それだけで視覚的に意味を持ちうる。文字には音声の写しという機能以外に、図像性という視覚に訴える機能もあり、ハーマンはそういった文字そのものに備わっている、音声とは異なるコミュニケーション的な機能にも注意を払っているのである。

ハーマンにおける文字論は、以上のように、同時代においても特異なあり方をしていたということであるが、その基礎をなしていたのが、「へりくだり」の思想であり、さらに文字そのものに意義を見出す考え方だったのである。

#### 4 文字と書簡性

ハーマンにとって、文字は言語コミュニケーションにおいて決して軽視することのできない要素なのであるが、本書では、ハーマンがほかならぬこの文字による対話を、書簡体の形式をとった著作によって試みようとしていたことが論じられる。そうした著述活動の性格を捉えるために提示されるのが、「書簡性」という概念である。著者によれば、これまで、ハーマン研究においては、ハーマンの著述活動を言い表すために「対話性」という概

念が用いられてきたという。しかし、そうした「二者が音声を用いて口頭で行う言語活動を想起させる『対話』の概念よりも・・・書簡性という概念を用いる方がより適切」(194)なのではないかとして、ハーマンの思想を理解するための新たな視点の導入を試みている。本書では、こうした書簡という形式において、「音声と文字とが重なり合うコミュニケーションの空間」が成立していることが指摘される(195)。そして著者は、「音声だけの対話では不可能な、文字の大きさや書体の種類といった文字特有の図像的效果をも加えて対話の相手に『語りかける』こと」(224)ができる点を強調する。ここに、書簡という形式に備わっているコミュニケーション的な特徴が認められるというわけである。

本書でも指摘されるように、ハーマンの主要な著作は、書簡体の形式をとっている。たとえば、ハーマンが初めて公刊した『ソクラテス追憶録』は、公衆と二人の友人（カントとベーレンス）に宛てられた書簡という形式をとっている。また『学校劇に関する五つの牧会書簡』も、特定の名宛人に向けられた書簡体の著作になっている。こういった書簡という形式による著作には、著者によれば、ある戦略が組み込まれている。それは、その著作が向けられた特定の名宛人に対する「挑発」である。著者は、ハーマンの書簡体による著作を「挑発する書簡」として特徴づけているが(216)、こうした「挑発」によって、それが向けられたある特定の「読者」は半ば強引に対話の場に引き連れ出されることになるのである(215-216)。

このように、書簡という形式によるハーマンの著作には、相手方を挑発して、何らかの形で対話へと引き込もうとする意図が込められている。書簡は、ここでは、著作として公刊されているゆえに、開かれたあり方をしている一方で、それが特定の相手に向けられているゆえに、閉ざされた個別的な要素も含んでいる。著者は、この後者の要素こそが、「読者を文字による対話へと誘う」(215)とし、さらにそこでは、「『理解』のためにそれぞれが苦闘しながらコミュニケーションする場」(218)が創出され、そういった対話の場が開かれる点に、書簡の意義があることを明らかにしている。

さらに、本書では、こうしたハーマンの書簡という形式による著述活動が、ハーマンの思想の核心をなす「へりくだり」の思想と決して無関係ではないことも強調される。ハーマンの理解によれば、「自然」は「書物であり、書簡であり、寓話である」(224)。つまり、神の創造の行為（コミュニケーションとして理解される、創造における神のへりくだり。RGG 第4版「ハーマン」の項目参照）が、文字を媒体とする書物や書簡、寓話との関わりで比喩的に捉えられるのである。ここでは、「自然」が「書簡」に喩えられることによって、

神と人間とのコミュニケーションの媒体としての「自然」が「書簡」とも重ね合わせられることになる。さらにハーマンにとって「書簡」は「低俗な文体」としても理解されている（224）。つまり、そうした「低い」ところへと「へりくだる」ことが、コミュニケーションそのもののあり方なのである。このように、書簡体による著述活動は、「へりくだり」の思想にまさに適合する形式として理解されるわけである。

## 5 むすび

以上が、本書において展開されている議論の主な概略である。なお、これらのほかにも、本書では、言語起源をめぐるヘルダーあるいはズースミルヒとの関係（ハーマンは、その固有の言語理解を根拠にして「神的・人間的言語起源論」という立場をとる）や、ハーマンの翻訳論などが議論されており、ハーマンの思想的広がりについても多く学ぶところがある。ただ評者は、ハーマンの言語思想について事細かに批評できる立場にはないので、以下では、本書の論述をたどっていく中で率直に疑問に思った点に限ってコメントすることにしたい。

まず、著者が本書において設定している目的に関わる点であるが、本書では、以上見てきたように、ハーマンの諸著作が「言語コミュニケーション」としての意義を持つものであることが、その「へりくだり」の思想を手がかりにして明らかにされる（37）。ハーマンの「へりくだり」の思想が、コミュニケーションの形式そのものとして捉えることができるということは、本書における「へりくだり」の議論や文字論、「書簡性」という概念から理解されることは確かである。

しかし、本書で「コミュニケーション」と言われる場合、そこではどういうことが意味されているのだろうか。そのことが明確には論じられていないように思われる。もちろん、呼びかけに対する応答の相互関係のこととしてコミュニケーションは理解される、ということは示唆されるわけであるが（たとえば、ハーマンの言語起源論をめぐる議論などから。117 頁参照）、コミュニケーションの概念規定は、それが本書における重要な概念であるにもかかわらず、曖昧なままである。たとえば、ハーマンの言語思想に認められるとされる「コミュニケーション」概念と、普通一般に認知されている「コミュニケーション」概念との間に差異はないのだろうか。そもそも、なぜ、一方における「へりくだり」という行為が、他方にとっては難解で「挑発」と映るようなテキストとなって現実化することにな



ののだろうか。これらのことが十分に説明されていないために、ハーマンの「へりくだり」の思想と「コミュニケーション」との関係が、依然として不明瞭なままにとどまっているように思われるのである。

では、その理由が問題になるが、一つ挙げることができるのは、「アナロジー」（類推）に依拠した本書の論述の仕方であろう。たとえば、本書では、ハーマンの「へりくだり」の思想に見られる『神と人との関係』が著者と読者との関係のアナロジーとなり、コミュニケーションを支えている。ハーマンのコミュニケーションは神の『へりくだり』に類似の構造を有する（7）ということが述べられている。「神と人との関係」が、ハーマンの思想においてはコミュニケーション的な関係として捉えられるので、「著者と読者との関係」も、「へりくだり」という観点からコミュニケーション的な関係として類推されるということは、類似しているという点ではその通りであろう。しかし本書では、そのことが結論的に述べられるにとどまっている。重要な論点をめぐって、十分な論証がなされていないように思われるのである。

また、文字論に関わる点であるが、著者はハーマンにおける文字理解について、「へりくだり」の思想を根拠に、「文字」が「霊」の具象化として理解されることを明らかにしている（第5章）。「文字」が、「霊」との関連で捉えられているという点は重要だと思われるが、そのことがどのような意味で「文字」における図像的なものと結びつくことになるのかそれほど明瞭ではない（第6章）。ハーマンの文字論に注目するのが本書の特徴として挙げることができる一方で、「へりくだり」の思想とその文字論との関係については、限定的にしか扱われていないように思われる。

とはいえ、本書では、ドイツ啓蒙主義の時代に活躍したハーマンの言語思想の際立った特異性が明らかにされており、思想史的にきわめて示唆的な議論が展開されている。さらに、ハーマンの言語思想を「書簡性」という新たな概念によって把握しようとする試みなどは、「書簡体」という同じような著作のある著述家を研究対象とする者にとっては参考になる。評者はキルケゴールの思想を研究対象としていることから、著述の方法や「コミュニケーション」のあり方をめぐる両者の親近性について確認することができた。キルケゴール研究との関連では、同時代人同士であるレッシングとハーマンとの関係が、特に神学的・宗教哲学的観点において興味深い論点として浮かび上がる。また、本書の研究に取り入れられているパラテキスト分析などは、キルケゴール研究の方法論としても有意義な仕方では参照することができるだろう。本書は、方法論的な意義も合わせて、思想研究として

参照に値する研究である。